

20人の夢を実現させた 「いわき天体観測所」 6年目の秋にむかえた 開所式

■作業着がにあうヒゲの田中政明さん。望遠鏡を載せるコンクリートピラーのベースの穴を掘る。深さ2m
写真右上、'84年秋

■建物の基礎工事など、素人でできる仕事は、日曜・休日の肉体労働。
写真下、'85年6月

■メンバーの汗がしみこんだいわきの地で、肉眼で金星が見えたほとどのさわやかな秋晴れの良き日、11月6日大安吉日、紅葉とスキの穂に見守られ、さわやかな宴が開かれた。



'82年の春から、観測所を建てる場所さがしをはじめ、'83年秋には、「いわき」の地に決定。土木作業を開始、'84年秋、望遠鏡用のコンクリートピラーの穴を掘り、'85年春、ピラーを作り、建物の基礎工事をはじめ、同年夏には外観は完成。望遠鏡を設置し、観測開始。「86年、ハレー彗星の観測に、写真撮影にと大活躍し、「87年11月22日メンバーの市村義美さんが新彗星発見。「88年11月6日いちおうの完成をみて開所式を迎える。



例によってとつくりに締め切りが過ぎて、いるウォッチャーズガイドの彗星の原稿を持って、これも例によつて真夜中に編集部を訪ねられた田中政明さんが、「今度、いわきの開所式をやるから来てね」とひとこと。「いわき」とは、福島県いわき市にある「いわき天体観測所」のことだ。

「まだできてなかつたの……?」とのわたしの問いに、まだまだ風呂と暗室が残っているが、いちおうのけじめにいたが、ずっと半完成で、台所や内装など手つかずだったのだ。

さて、その開所式の当日、11月6日の午前3時ごろ、わたしたちは、観測所へ向かう道すがら、たびたび車を停めてはひさびさに見る「生の星空」を楽しんでいた。地図上の観測所に近づくほどに空は暗くなり、民家はまばらになり、この先、ほんとうに道があるのだろうかと思えるほど、名ばかりの国道のワインディングを右へ左へとハンドルを切つていた。

途中、ずいぶんと道くさをしてたせいで、観測所にたどりついたときには、すでに東の空が白んできていた。観測所の方も、みなさん、もうお休みのようなのでしかたなく車の中でもシュラフにくるまる。

例によってとつくりに締め切りが過ぎて、いるウォッチャーズガイドの彗星の原稿を持って、これも例によつて真夜中に編集部を訪ねられた田中政明さんが、「今度、いわきの開所式をやるから来てね」とひとこと。「いわき」とは、福島県いわき市にある「いわき天体観測所」のことだ。

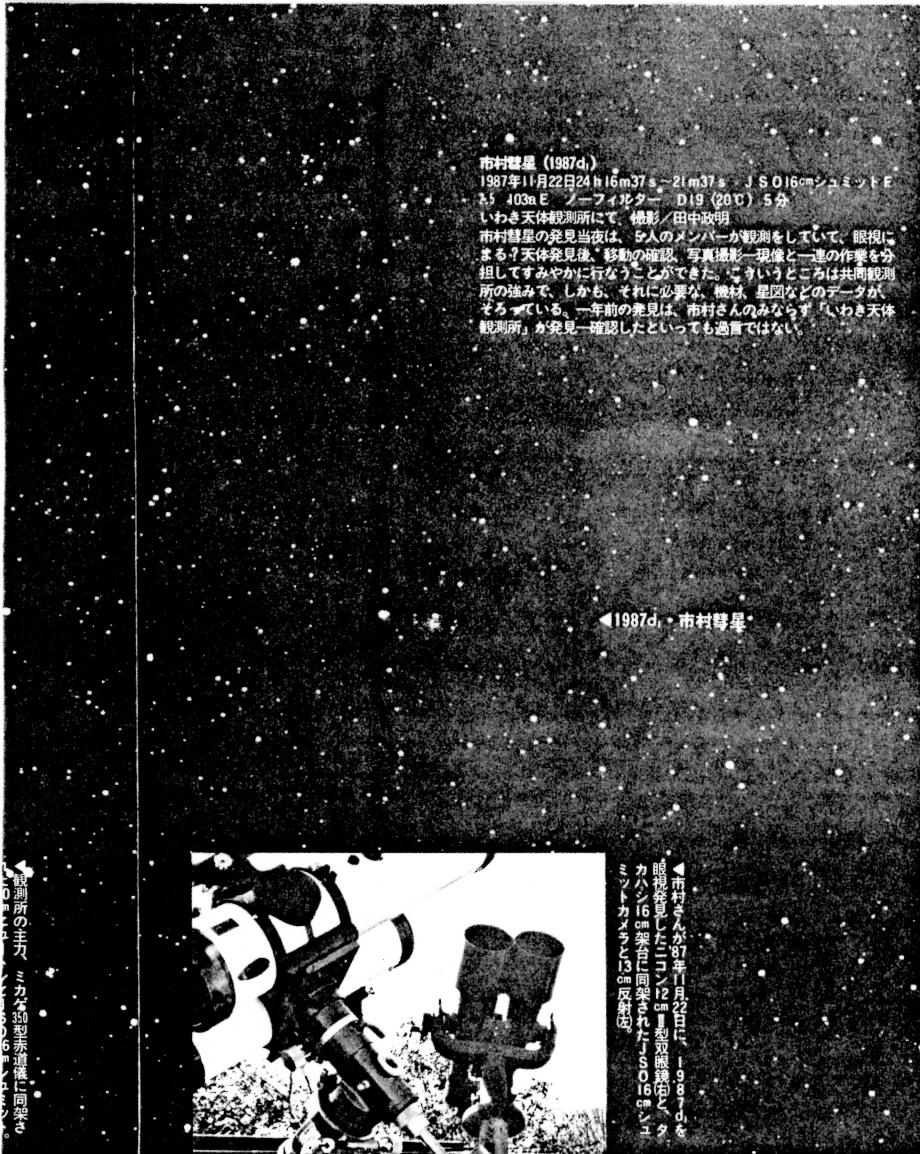
「まだできてなかつたの……?」とのわたしの問い合わせに、まだまだ風呂と暗室が残っているが、いちおうのけじめにいたが、ずっと半完成で、台所や内装など手つかずだったのだ。

さて、その開所式の当日、11月6日の午前3時ごろ、わたしたちは、観測所へ向かう道すがら、たびたび車を停めてはひさびさに見る「生の星空」を楽しんでいた。地図上の観測所に近づくほどに空は暗くなり、民家はまばらになり、この先、ほんとうに道があるのだろうかと思えるほど、名ばかりの国道のワインディングを右へ左へとハンドルを切つていた。

途中、ずいぶんと道くさをしてたせいで、観測所にたどりついたときには、すでに東の空が白んできていた。観測所の方も、みなさん、もうお休みのようなのでしかたなく車の中でもシュラフにくるまる。

おくればせながらの 開所式





市村彗星 (1987d)
1987年11月22日24時16分37秒～21時37秒 J.S.O 16cm シュミット E
2.5×103aE ノーフィルター D19 (20°C) 5分
いわき天体観測所にて 撮影/田中政明

市村彗星の発見当夜は、5人のメンバーが観測をしていて、眼鏡による? 天体発見後、移動の確認、写真撮影、現像と一連の作業を分担してすみやかに行なうことができた。そういうところは共同観測所の強みで、しかも、それに必要な、機材、星図などのデータが、そろっている。一年前の発見は、市村さんのみならず、「いわき天体観測所」が発見確認したといつても過言ではない。

翌朝というより、翌日、日がさめた頃には、観測所前の広場にテーブルが並んで、メンバー手づくりの料理が盛りあがめられているところだった。紅白のタレ幕もはられ、いかにも開所式というセレモニーの準備。いつも思うことだが、こういうことは、参加するより主催者たほうがおもしろい。観測所も、ただ使うだけというより、作っている過程の方がおもしろいという人もいる。

しかし、完成した後も、使わなければ意味がない。20～30人のメンバーを集めて共同観測所を作つてみても2～3年たてば、使つてているのは中心メンバーの数人というところもあると聞く。

「いわき」の場合は、望遠鏡が使えるの観測所が活用され、真の完成へと近づいていくほしいものだ。使われて、夜の利用があつたという。一人平均 9.5 夜(86年)、6.9 夜(87年)という回数だ。

'86年はハレーがあつたとしても、大半のメンバーが、4～5時間もかかる東京周辺に住んでいる観測所としては、利用率が高い方だろう。

「観測所」と名のついているからには、『観』だけではなく、『測』の方もりっぱに行なつてほしい』との米賀の香西洋樹先

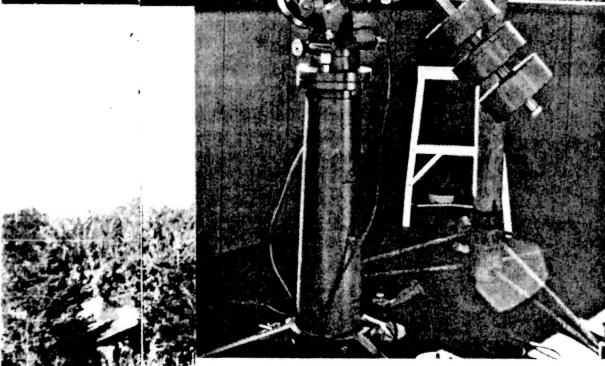
いわきの例はさておき、一般論として天文趣味人にとって、自分の観測所を持つことは大きな夢である。都市に住む天文ファンにとって、星が見たいという欲求は、遠くへ出かけたいという欲求に等しい。星空を愛する人たちは、星だけでなく、星をふくめた自然が好きで、その中に自らを置き、しばしの心の休息を求めるものなのだから……。

かくして、新月近くの週末には、美しい星空を求めて車を走らせたり、電車に乗つて郊外へと出むくことになる。そして、もっと大口径機を使えれば……、いつでも軸軸が出ていてシャッターオンオフすれば写真が撮れるようになれば……、星を楽しむための別荘みたいなものがあれば……、そんな欲求を同時に満たしてくれるものが、望遠鏡付別荘『天体観測所』だ。

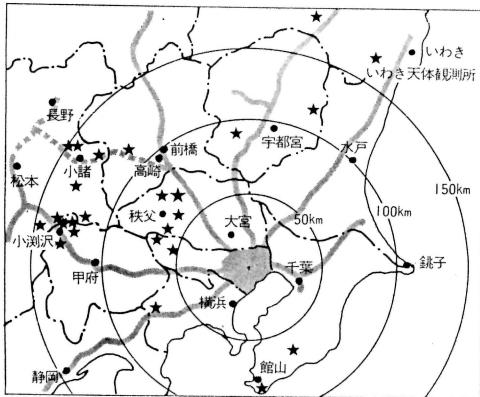
ある人は、彗星の搜索・観測のため、

◀1987d・市村彗星

●市村さんが87年11月22日に撮影した三コントローラー型双眼鏡(右)と、タカハシ16cm架台に同架設されたJ.S.O 16cm シュミットカメラと13cm反射鏡。



観測所の主力 ミカタ350型赤道儀に同架設される。



関東一円の共同観測所の分布
個人観測所は除く(編集部調べ)

困難をきわめた 候補地選び

「問題はどこに建てるか」であったと観測所の代表者格である田中政明氏は語っている。ハレー彗星までにはと急ぎつつも、場所選びには慎重の上にも慎重をきしたという。

天体観測所の立地条件としては、まず空が暗いこと、それに電気、水道がひきやすいこと、交通の便がよいことなどがあげられる。これらの条件は、互いに相反し、どこかで妥協しなければならない。しかも、東京から200キロ圏内でとなると候補地選びはさらに困難さを増す。

天体観測所の立地条件としては、まず空が暗いこと、それに電気、水道がひきやすいこと、交通の便がよいことなどがあげられる。これらの条件は、互いに相反し、どこかで妥協しなければならない。しかも、東京から200キロ圏内でとなると候補地選びはさらに困難さを増す。

そして、最終的に残ったのが、福島県南部いわき市の西のはずれにあたるこの「いわき天体観測所」だった。着工は'83年9月。当時はまだ、常磐自動車道が、水戸あたりまでしかできていなく、東京から5~6時間もかかるついたが、今では、いわきまで高速道路が伸びおかげで3時間たらずとなつた。

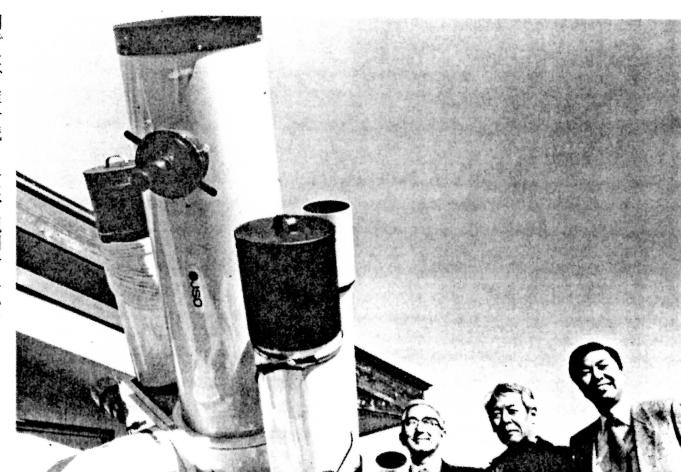
もちろん、高速道路開通をみこしてのいわきへの最終決定であつたのだが、観測所としての将来性も重要視したという。観測所の、今がよくても、将来においてそれが持続するとはかぎらない。田中政明さんのことばをかりれば、「地元の人には悪いが、ここは、今後、当分は、開発されそうにない」ということもいわきに決まった要因のひとつという。さらに、「ここは、雪もあり降らず、冬は連日の晴天が期待できる」とから、いわきも含め、茨城県北部から、福島県南東部は、関東一

交通の便がよい所には街ができる、工場が進出し、空は明るくなる。もっと遠くへと候補地を伸ばせば、選択の幅も広がるが、そこへ行くまでの時間がかかりすぎ、観測所への足も遠のく。

'83年3月に20名のメンバーがそろう

1年前の'82年春、すでに初期メンバーは、新月の毎日曜、観望もかねて空の暗さを確かめながら関東周縁へと候補地選びを始めていた。調査地域は、群馬県西部、茨城県北部、福島県南東部へと及んだ。

人物は左から
山口正博先生(宇摩院大学)
香西洋樹先生(国文学文部省国文學院大妻)
ララ学社長の各業界の方たち



円では、唯一残された、観測所立地の穴場ではないだろうか。
そんなことも含め「いわき」の代表者である田中政明さんは、これから自らの手で観測所をとく人のために、「いわき天体観測所のすべて」と題した小冊子を実費にて配布したいとのことだ。希望の方は、郵便振替(東京7-57007・田中政明)で申し込み下さい。送料とも一部500円。

